

修煉される性

——劉一明の思想——

序章

明清期の内丹文献の多くは、「性命雙修」を説いた。これは、内丹において、心性に關わる「性」の修煉（性功）と氣に關わる「命」の修煉（命功）とを等分に重視しようとする立場をあらわしている。

内丹とは、基本的に、瞑想において體內の氣を操作し、金丹を生成して、不老長生を達成しようとする思想的營爲である。煉氣の方法説明においては、鉛や水銀を鼎において烹煉し丹藥を生成しようとする外丹の概念が援用されたため、内丹は思念内の操作であるにもかかわらず、技術ないし技法と考えられるものであった。そして明清期までには、その技法はかなり整備されたものとなっていた。

一方、内丹においては古くから、煉氣に加え、性の修煉も必須と考えられてきた。「性命雙修」を説く文献の典型としては、まず北宋の張伯端『悟眞篇』が挙げられるが、その性功は、「煩惱の由りて更に心に上る無し」^①「終に眞如覺性を以て其の幻妄を遣りて究竟空寂の本源に歸す」^②と述べられるように、心から煩惱を除去し、空の境地に達するという、佛教的、とくに禪的な悟りを志向するものであった。^③こ

修煉される性

石田志穂

の、欲望を除去して清淨な心性を保つことを目的とする性功は、南宋の陳楠や白玉蟾といった、いわゆる内丹南宗の人々にも受け繼がれていたが、とくに性功を重視したのは金元以來の全眞教であった。全眞教創始者の王重陽は、「燒煉を休めよ、修持する莫かれ、元來は只是だ這些兒」^④「功を行ふ莫かれ、打坐を休めよ。如し修持を要せば、先ず心猿をば鎖れ」^⑤と説いた。『悟眞篇』においては命功後の要請であった性功が、王重陽においては命功の前提とされているというような違いはあるが、性功そのものの内容は、『悟眞篇』と同様、心を清淨に保つことであり、やはり禪の悟りに近いものであった。元の李道純も、『中和集』においてやはり性功を佛教的な心的境地の達成であると述べていた。明清内丹に至っても、このような佛教的煉性は依然として、しばしばみられるものであった。

ところで、本稿が対象とする清の劉一明もまた、「性命雙修」を説く内丹家の一人であった。彼の「性命雙修」の内容は、とくに煉性の側面において従来とは異なるものがあつた。その煉性は、直觀的・直覺的なものとは異なり、煉氣にも匹敵する、性自體を煉る技術・技法・操作として説かれていたのである。そしてそのために、劉一明は性そ

のものを構造的・分析的にとらえようとしていた。本稿は、劉一明の煉性理論の内容とその意義について論ずるものである。

第一章 劉一明について

まず、劉一明の事跡について簡単にみておく。

劉一明（一七三四〜一八二二。號は悟元子・素朴子・被褐散人）は、清の乾隆・嘉慶年間に甘肅棲雲山を據點に活動した、全真教龍門派第十一代の道士である。彼は山西曲沃（現在の山西省侯馬市付近）に生まれた。十代のとき大病を患い、その養生のために西秦に向かう途中で、一人の蓬頭の老人から良方を授かって治癒した。それをきっかけに求道を志して外遊するようになる。二十二歳のとき、甘肅榆中（甘肅省榆中縣）で龔谷老人に師授を受ける。その後、諸家の丹經の讀書に専念するが、いまだ理解できない部分があったため、さらに教えを求めて十三年間各地を放浪する。その歴訪は、北京・河南・山西・陝西など廣範圍にわたった。そして三十九歳のときに漢南（湖北省宜城縣）で仙留丈人に出逢い、ついに丹經の眞の奧義を得、疑念を晴らすに至った。その後は甘肅棲雲山に自在窩という庵室を結び、蘭城（甘肅省蘭州市）や興隆山（榆中の南）を往來しつつ、八十八歳で没するまで教導と著述にいそしんだ。

劉一明は易學・内丹・醫學など廣い分野にわたる著作を行っている。彼が龔谷老人や仙留丈人からいかなる内丹法を授かったかは不明であるが、彼の著作のうちには、『參同契經文直指』『參同契直指箋註』『參同契直指三相類』『悟眞直指』『陰符經註』『敲爻歌直解』『百字碑註』『西遊原旨』『無根樹解』『黃庭經解』『金丹四百字解』など、内丹において傳統的に重視されていた書物から、彼の直前の時代の内丹書

までにわたる、多くの注釋書があった。彼はこれらの傳統を踏まえた上で、みずからの内丹思想を構築してしたのである。『象言破疑』『通關文』『修真辨難』『修真後辨』『神室八法』『修真九要』には、彼自身の修養論が、内丹を中心として展開されている。また『周易闡眞』『孔易闡眞』は、『周易』と易傳に對し、それらを内丹を説く書物とみなして注釋したものである。『悟道錄』『會心內集』『會心外集』は、彼自身の修行の過程を振り返りつつ、修養の原理について説いている。

第二章 性情の交合としての陰陽交合

劉一明の説く修養の全體の流れは、『修真九要』によって追うことができる。ここでは修養は九つの階梯に分けられている。まず、世事の虚しさを知り、道に志さなければならぬ（勤破世事第一要）。次に、仙道を修めるに先立ち、人事に關して徳を積まなければならない（積徳修行第二要）。次に、先人の言葉や經書を學び、理論を詳細に研究しなければならぬ（盡心窮理第三要）。また、良い師を得て教えを受けなければならない（訪求真師第四要）。次に煉己を行う。煉己には、貪愛をなくす、精・氣・神を安定させる、睡魔を打破するなど様々な内容が含まれるが、それらは金丹生成のために必要な準備段階である（煉己築基第五要）。次に、陰陽を合して金丹を生成する（和合陰陽第六要）。次に、火候を用いて丹藥を溫養する（審明火候第七要）。以上の作業を経て「天賦の正氣」が身に具わる（外藥了命第八要）。そして最終的に明心見性が達成される（内藥了性第九要）。

このような修養の流れは内丹思想においてとくに異例のものではない。例えば、劉一明は張伯端の著作『悟眞篇』に注釋を施している（『悟眞直指』）。その張伯端の内丹プロセスは基本的に、煉己に始まり、

陰陽交合によって丹藥が生じ、丹藥(胎)を溫養して完成させ、最後に脱胎して永遠不變の身體を獲得すると同時に、見性(禪における最高の心的境地)を達成するというものであった。劉一明の修養法もまた、おおまかにはこのプロセスに沿っているといえる。

しかしここで、陰陽交合して金丹を生成することについてとくに取り上げたい。というのも、劉一明の陰陽交合には、ある特殊な意味づけがなされているからである。

『悟眞篇』における陰陽交合とは、心臟に宿る陽中の陰氣(眞火、眞汞)が下降し、腎臟に宿る陰中の陽氣(眞水、眞鉛)が上昇して、丹田において交合し、男女交合によって胎兒が生まれるがごとく、丹藥として結實することを意味していた。『悟眞篇』の内丹プロセスと、その體系内で使用される用語は、明清期の多くの内丹家が採用していたもので、例えば、「龍虎」「鉛汞」「水火」「夫婦」などの一對の概念は、多くの場合、身體を構成する「陰氣」と「陽氣」(二つの異なる様態・方向性をもつ氣)を指すものであった。

一方、劉一明は陰陽について次のように説明している。

先天の陰陽は、有無是れなり。後天の陰陽は、心腎是れなり。……蓋し心腎の陰陽は、乃ち父母交媾精血の化す所なり。氣有り質有り、所以に身に隨いて有無す。先天の陰陽に至りては、法身より出づ。乃ち虛無一氣の生ずる所なり。氣有り質無し、所以に天地と長久す。……噫、一身の後天の陰陽は、且れ性を了し命を了すること能わず。

(先天陰陽、有無是也。後天陰陽、心腎是也。……蓋し心腎陰陽、乃ち父母交媾精血之所化。有氣有質、所以隨身而有無。至於先天陰陽、從法身而出。乃虛無一氣所生。有氣無質、所以與天地而長久。

修煉される性

……噫、一身後天陰陽、且不能了性了命。(『修真後辨』九 a 八
一〇 b 二)

劉一明は陰陽を、「先天の陰陽」と「後天の陰陽」とに分けている。「後天の陰陽」とは、両親の精血の交わりから生じた有氣有質な心腎の氣であり、用いるべきではないとされている。「虛無一氣」から生じた有氣無質の「先天の陰陽」を用いるべきとするのである。

「先天の陰陽」の根源である「虛無一氣」は、次のようにもいわれる。

金丹の道は、惟だ先天眞一の氣を採取するなり。先天の氣は無形無象にして、之を視れども見えず、之を聽けども聞こえず、之を搏うるも得ず、乃ち虛無中より來たる者なり。

(金丹之道、惟採取先天眞一之氣也。先天之氣、無形無象、視之不見、聽之不聞、搏之不得、乃自虛無中來者。)(『修真九要』一

一 a 七 九)

虚無中より來たる無形無象の「先天眞一の氣」を採取せよという。つまり「虚無一氣」とはこの「先天眞一の氣」にあたるものであり、金丹でもある。劉一明は、「先天の陰陽」を交合してその根源である「先天眞一の氣」に到達することを目指しているのである。

「先天の陰陽」は、「有氣無質」という表現からすれば氣といえるが、「心腎の氣」などとは異なるものであった。では「先天の陰陽」とは何を指すのか。劉一明は、「陰陽」の一形態である「鉛汞」を通じて、次のように述べている。

鉛の性は沈重なり。其の氣は堅剛にして久しきを経るも壞れず。此を眞鉛と云う。世間の有形有質の凡鉛に非ず。乃ち人身の無形無質の眞知の眞情なり。

(鉛性沈重。其氣堅剛、經久不壞。此云眞鉛。非世間有形有質之凡鉛。乃人身無形無質眞知之眞情。)(『金丹四百字解』一b五、六)

「眞鉛」の異稱として、劉一明はその著作において「虎」「金公」「月中兔」など陰ないし陽中の陰を示す語を列挙している。このように言い換えは他の内丹思想にもしばしばみられるものである。しかしここで注目されるのが、劉一明の「眞鉛」が「眞知の眞情」とされている点である。同様に、「眞汞」についても次のようにいう。

汞を活動の物と爲す。其の性は輕浮なり。其の氣は陰柔にして走失し易し。此を眞汞と云う。世間の有形有質の凡汞に非ず。乃ち人身の無形無質の靈知の靈性なり。

(汞爲活動之物。其性輕浮。其氣陰柔、易於走失。此云眞汞。非世間有形有質之凡汞。乃人身無形無質靈知之靈性。)(『金丹四百字解』二a三、五)

劉一明は「眞汞」の異稱にも「龍」「木母」「日中鳥」など、一般に陽または陰中の陽を指して用いられる呼稱を列挙している。しかしこの「眞汞」もまた、「靈知の靈性」とされている。

以上のことからすると、劉一明が金丹生成のために用いる「先天の陰陽」や、その象徴的表現である「鉛汞・龍虎・日月」などは、全て「眞知の眞情」と「靈知の靈性」ということになる。つまり、劉一明の「陰陽交合」とは、「眞知の眞情」と「靈知の靈性」、すなわち「情」と「性」との交合を意味するのである。

「性」は人間の心に宿る本性、「情」は心の作用・發動である。性情交合としての陰陽交合とは、心や心の作用を煉ること、すなわち、心のはたらきや知的營爲の修煉であるといえる。劉一明は、次のように

述べている。

且、性は心の生ずる所なり。心は神の舍と爲す。心、明らかなれば則ち神、清し。神、清ければ則ち性、定まる。所以に道性の造化は心に係る。命は人の一叩なり。叩けば則ち必ず應ず。應ずれば則ち氣、活たり。氣、活なれば則ち命帶と爲る。人は即ち身なり。所以に道命の造化は身に係る。

(且性は心之所生。心爲神舍。心明則神清。神清則性定。所以道性之造化係乎心。命者人之叩。叩則必應。應則氣活。氣活爲命帶。人即身也。所以道命之造化係乎身。)(『修真後辨』八a九、b三)

劉一明は、性を人間の心・知的營爲の根本とし、それに對して身體活動の源である氣にかかわるものを命としている。この區分によれば、劉一明の心の修煉としての陰陽交合(性情交合)は、煉氣の命功(いわゆる陰氣と陽氣の交合)ではなく、煉性の方法として構想されているといえる。

それでは、劉一明の煉性とは、具體的にはいかなるものなのだろうか。そこで次に、彼の煉性のプロセスをみてゆくこととする。

第三章 性情交合のプロセス

性情交合を説くにあたり、劉一明は、性情の構造を次のように説明している。

靈性は虚靈の火を具有して靈知と爲る。外陽内陰にして、陰少なく陽多し。陰、陽中に藏さる。其の中の陰は火に屬するが故に一點の紅と謂う。眞情は剛正の氣を具有して眞知と爲る。外陰内陽にして、陽少なく陰多し。陽は陰内に藏さる。其の外の陰は水に

屬するが故に三斤の黒と謂う。

（靈性具有虚靈之火爲靈知。外陽内陰、陰少陽多。陰藏陽中。其中之陰屬火、故謂一點紅。眞情具有剛正之氣爲眞知。外陰内陽、陽少陰多。陽藏陰内。其外之陰屬水、故謂三斤黒。）（『金丹四百字解』九b八（一〇a二））

「靈性」は「外陽内陰」、つまり陽の中に陰が包まれる構造をしている。この陽中の陰は「虚靈の眞火」であり、「靈知」である。また、「眞情」は「外陰内陽」であり、陰の中に陽が包まれる構造をしている。この陰中の陽は「清淨無欲の神水」であり、また「眞知」である。さらに、易卦を用いる説明により、これらに對するより一般的な理解が與えられる。

金丹の陰陽は、我家を以て陰と爲し、他家を以て陽と爲す。我を離と爲し、他を坎と爲す。離中の一陰を眞陰と爲し、坎中の一陽を眞陽と爲す。

（金丹陰陽、以我家爲陰、以他家爲陽。我爲離、他爲坎。離中一陰爲眞陰、坎中一陽爲眞陽。）（『修真九要』和合陰陽第六要 一b七（九））

「眞陰」離中の一陰（離卦命の第二爻に象られる）は陽中の陰であるから、「靈知」にあたる。「眞陽」坎中の一陽（坎卦迷の第二爻に象られる）は陰中の陽であるから、「眞知」にあたるというわけである。「靈性」「眞情」の構造は、また次のようにも言い換えられている。

但だ、性に氣質の性有り、天賦の性有り。情に愛欲の情有り、无妄の情有り。氣質の性は後天なり。天賦の性は先天なり。愛欲の情は後起なり。无妄の情は固有なり。

（但性有氣質之性、有天賦之性。情有愛欲之情、有无妄之情。氣

修煉される性

質之性者、後天也。天賦之性者、先天也。愛欲之情者、後起也。

无妄之情者、固有也。）（『金丹四百字解』七b三（六））

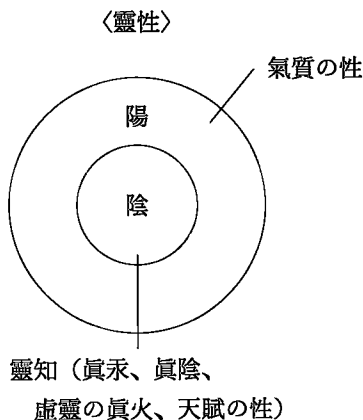
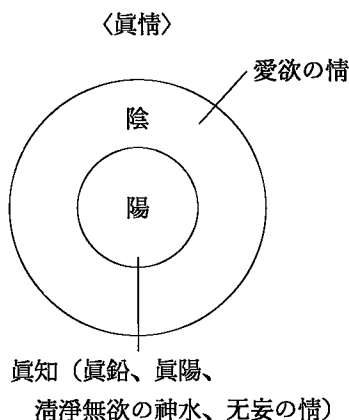
但だ、性情に眞假の別、先後の分有り。圓明の性、無色の情を眞と爲す。先天なり。氣質の性、塵縁の情を假と爲す。後天なり。有生以來、假なる者、眞なる者の中に雜まじる。

（但性情有眞假之別、先後之分。圓明之性、無色之情、爲眞。先天也。氣質之性、塵縁之情、爲假。後天也。有生以來、假者雜於眞者之中。）（『金丹四百字解』一七b四（六））

「性（靈性）」は「天賦の性（圓明の性）」と「氣質の性」に分けられ、「情（眞情）」は「无妄の情（無色の情）」と「愛欲の情（塵縁の情）」に分けられる。「天賦の性」と「无妄の情」は先天に屬し眞であり、「氣質の性」と「愛欲の情」は後天に屬し假である。先天の「天賦の性」が「靈知」に、同じく先天の「无妄の情」が「眞知」にあたることになる。この先天の「眞知」「靈知」が、金丹の素材となる「先天の陰陽」なのである。

「靈知」「眞知」は通常の性情に内在する、さらに純粹・精妙な性情であるといえる。そしてこの純粹な性情（心のはたらき）は、「靈知」「眞知」といわれるように、「知」とされるものであった。劉一明の煉性は、以上のような構造を持つ「性」「情」そして「知」の修煉によって、最終的に「先天眞一の氣」に到達するプロセスととらえられるのである。

劉一明の性情交合の具體的プロセスは以下のようなものであった。蓋し眞知の鉛、陰中に陥するを以て、坎卦の外陰内陽に象る。陽は陰胞に在り。客氣、正氣を掩蔽すれば、正氣、自ら出づること能わず。若し之を出さんと欲すれば、其の用は却って離宮に在り。



靈知は外實内虚にして、離卦に象る有りて、虚靈の眞火を具有す。此の眞火を以て後起の客氣を煉去すれば、則ち眞知現れて靈知と相い合す。

(蓋以眞知之鉛、陷於陰中、象坎卦外陰内陽。陽在陰胞。客氣掩蔽正氣、正氣不能自出。若欲出之、其用却在於離宮。靈知外實内虚、有家於離卦、具有虚靈之眞火。以此眞火煨去後起之客氣、則眞知現而與靈知相合。)(『金丹四百字解』一一a一五)

後天の「客氣」である「愛欲の情」に覆われ、その中に埋没している先天の「正氣」すなわち「无妄の情(眞知)」は、それ自體の力では外に出ることができない。そこで、性中の「靈知」のはたらきが利用される(其の用は却って離宮に在り)。「虚靈の眞火」である「靈知」によって、情中の後天要素「愛欲の情」を焼却し盡くせば、先天の「眞知」のみが残るのであり、ここに情中より「眞知」が抽出される。

一方、先天の陰陽(眞知・靈知)の交合のためには性中の「靈知」も抽出されなければならない。

眞汞の靈知は識神之雜氣を藏有す。離卦の外明内暗に象る。識神は靈に借りて妄を生ず。火を見れば則ち飛ぶ。若し眞知の鉛以て之を制すること無ければ、識神は禍と爲り、眞に返ること能はず。故に其の用は却って坎に在るなり。坎は眞知に喩う。眞知は眞一の淨水を具有す。此の淨水を以て識神之邪火を撲滅す。邪火滅して靈知は眞に返る。……靈知、眞知の制伏を得れば則ち陰、來たりて陽に就く。外物の移す所と爲らず。靈知は眞知を戀い、眞知は靈知を戀う。

(眞汞之靈知、藏有識神之雜氣。象離卦外明内暗。識神借靈生妄。

見火則飛。若無眞知之鉛以制之、識神爲禍、不能返眞。故其用却在於坎也。坎喻眞知。眞知具有眞一之淨水。以此淨水撲滅識神之邪火。邪火滅而靈知返眞矣。……靈知得眞知制伏、則陰來就陽。不爲外物所移。靈知戀眞知、眞知戀靈知。(『金丹四百字解』一—a九b七)

人間のふつうの状態での「靈知」には「識神(妄想を生む心のはたらき)」が雜入している。これは先にみた「有生以來、假なる者、眞なる者の中に雜」じっている状態である。「識神」は「氣質の性」を指し、火を見ると飛ぶ浮薄な性質をもつ。そこで、先ほど抽出した「眞知」(眞一の淨水)で邪火を消滅させるならば、「靈知」は識神(假・後天の要素)を洗い流して純粹な「靈知」へと立ち返る。こうして、「眞知(无妄の情)」と「靈知(天賦の性)」という先天の「性」「情」が、後天の「性」「情」の影響を免れ、ともに本來的はたらきを取り戻すことになる。

ここまでは、「眞知」と「靈知」とが互いに他を純化しあうプロセスであった。ここまでの段階を、劉一明は「還丹」と呼ぶ。そして次の局面は、いよいよ「眞知」と「靈知」の交合となる。これが「大丹」の段階である。

問うて曰く、還丹大丹の理は如何にか分別せん。答えて曰く、還丹とは、其の原本に還る。後天中より先天に返るなり。大丹とは、原本を修具し、無象中に實象を生ずるなり。

(問曰、還丹大丹之理、如何分別。答曰、還丹者、還其原本。後天中返先天也。大丹者、修具原本、無象中生實象也。)(『修真辨難』一一b六c七)

還丹の坎中の鉛、離中の汞は、是れ後天中に藏する所の先天の鉛

修煉される性

汞なり。此の鉛汞を將い返出す、是れを還丹と謂う。又金丹と曰い、又眞種と曰い、又眞鉛と曰う。此の眞鉛を以て一己の陰汞を點ずるは、磁石の鐵を吸うが如し。此の汞は即ち離内の七般の硃砂なり。汞は鉛氣を得て、霎時に乾たり。後に已に死するの眞汞中の天然の眞火を用いて溫養すること十月、抽添運用して、鉛氣は片片に飛淨し去る。

(還丹坎中之鉛、離中之汞、是後天中所藏先天之鉛汞。將此鉛汞返出、是謂還丹。又曰金丹、又曰眞種、又曰眞鉛。以此眞鉛點一己之陰汞、如磁石吸鐵。此汞即離内七般硃砂。汞得鉛氣、霎時而乾。後用已死之眞汞中天然眞火、溫養十月、抽添運用、鉛氣片片飛淨而去。)(『修真辨難』一一b四c九)

「還丹」によって抽出された先天の鉛汞(眞知、靈知)は、内丹では一般に「金丹」と呼ばれるものにあたる。眞鉛(眞知)は、磁石が鐵を吸い集めるように陰汞(靈知)を吸い寄せ接觸する。すると陰(三の第二文)は眞鉛(三の第二文)のはたらきにより變化し乾(三純陽)となる。そして「大丹」とは、この接觸している「眞知」「靈知」を、純陽となった「靈知」の天然の眞火を用いてさらに溫養することである。

眞火神水は兩つながら合一し、水火相濟する。眞情靈性は和合し、眞知靈知は相戀う。情は即ち是れ性、性は即ち是れ情。

(眞火神水兩而合一、水火相濟。眞情靈性和合、眞知靈知相戀。情即是性、性即是情。)(『金丹四百字解』一〇a五c六)

性情混合し、眞知靈知凝結し、金丹成就す。

(性情混合、眞知靈知凝結、金丹成就矣。)(『金丹四百字解』一九a六)

溫養をへて最終的には「眞知」「靈知」、すなわち先天の性情は融合して一つになってしまう。このときにはもはや「眞知」「靈知」の相互作用ということもない。それらは一つの金丹として凝結し完成するのである。

以上のように、劉一明の陰陽交合（性情交合）とは、まず後天的要素（氣質の性、愛欲の情）に覆われている先天の「靈知（天賦の性）」「眞知（无妄の情）」を抽出し、次に「靈知（天賦の性）」の眞火によって「靈知」と「眞知（无妄の情）」とを融合して、それを「先天眞一の氣（金丹）」として凝結させるものであった。とすれば、この「先天眞一の氣」とは、純粹な性情として抽出された「靈知」「眞知」を融合純化した、さらに本來的・根源的な「知」であることになる。そして「先天眞一の氣」にまで「性」「情」「知」を煉化するプロセスには、煉氣のプロセスに匹敵する構造と分析・技法が備わっていたといえる。

もちろん、劉一明の性情交合（煉性）による金丹獲得は、煉氣による金丹獲得と全く隔離された別個のものとしてあるのではなかった。劉一明は本来、明清期には一般的であった「煉精化氣」「煉氣化神」「煉神還虛」という煉氣の方法によっても「先天眞一の氣」に到達しうると考えていた。

下丹は煉精化氣なり。中丹は煉氣化神なり。上丹は煉神還虛なり。三丹の名は是れ、層次に就きて言う。還虛の地位に到れば、精氣神は混じて一氣と爲る。是を金液大還丹と名づく。

（下丹者煉精化氣。中丹者煉氣化神。上丹者煉神還虛。三丹之名是就層次而言。到的還虛地位、精氣神混而爲一氣。是名金液大還丹。）（『修真辨難』四二b七〜九）

「先天眞一の氣」は、精・氣・神を生み出す母體であった。ゆえに、精・氣・神をその根源である「先天眞一の氣」へと煉化・還元するのである。これは煉氣の命功にあたるものであり、劉一明は煉氣による金丹生成という一般的方法をも承認していたのである。

しかし彼の特徵は、「陰陽交合」を煉性の理論ととらえていた点である。そして「先天眞一の氣」は、煉氣を通じてのみならず、性情交合（煉性）を通じても到達されるものであった。

但だ人は調和を知らざるを以ての故に、陰陽相い隔たり、生機消滅し、終に大化に歸す。若し眞知靈知坎離の根基は本より一氣に屬し、逆にして之を修め、坎離を顛倒し、眞知を以て靈知を制し、靈知を以て眞知を養う。水火相濟り、動靜は一の如きを會すれば、則ち心は即ち是れ道、道は即ち是れ心、心は道心と爲り、身は道身と爲る。

（但人不知調和、以故陰陽相隔、生機消滅、終歸大化矣。若會の眞知靈知坎離之根基本屬一氣、逆而修之、顛倒坎離、以眞知而制靈知。以靈知而養眞知。水火相濟、動靜如一、則心即是道、道即是心、心爲道心、身爲道身。）（『金丹四百字解』一七a一〜五）

「眞知」「靈知」の根基はもともと「一氣」に属している。「先天眞一の氣」は、精・氣・神の根源であるだけでなく、「眞知」「靈知」という「知」の根源でもある。ゆえに、「知」を煉化・純化してゆくことによっても「先天眞一の氣」に到達しうる。道への合致は身を通じても心を通じても可能なのである。劉一明は宋代以降の多くの内丹家と同様に「性命雙修」を標榜している。彼は、「先天眞一の氣」への到達という一つの事態を、性（心・知）と命（身・氣）という二つの方向においてとらえていたのである。彼の「性命雙修」とはそういう

ことであつた。

第四章 内丹的技術としての煉性—劉一明の煉性の背景—

内丹における煉性は多くの場合、心から煩惱を除去して空の境地に達するという、佛敎的（とくに禪的）な悟得を意味するものと説かれてきた。それに對し、劉一明の煉性（性情交合）は、性情（心・知）を分析的にとらえ、また構造的にとらえるものであり、煉氣に匹敵するほど操作的な、まさに性を煉る技法としてあつた。以下、このような劉一明の煉性理論構築の思想史的背景について考察したい。

劉一明は性を「氣質の性」と「天賦の性」に、情を「愛欲の情」と「无妄の情」とに分けたが、性を二種に分けて考える思想は、道敎のみにみられたわけではなかつた。北宋の張載『正蒙』²⁸に、すでに次のような記述がみられる。

形よりして後に氣質の性有り。善く之に反れば則ち天地の性存す。故に氣質の性は、君子、性とせざる者有り。……人の剛柔緩急、有才と不才は氣の偏なり。天は本より參和して偏らず。其の氣を養いて之を本に反して偏らざれば、則ち性を盡くして天なり。

（形而後有氣質之性。善反之則天地之性存焉。故氣質之性、君子有弗性者焉。……人之剛柔緩急、有才與不才、氣之偏也。天本參和不偏。養其氣反之本而不偏則盡性而天矣。）（『正蒙』誠明篇）

張載は性を「氣質の性」と「天地の性」とに分けたうえで、氣が偏らないようにすれば、氣に宿る性もまた天から賦與された本來の状態を保ちうると述べている。

このような道學の性説は道敎内丹に取り入れられた。例えば、『悟

修煉される性

眞篇』の作者張伯端に假託され明代正徳年間（一五〇六〜一五二一）に世に出たと考えられる『玉清金笥青華祕文金寶内煉丹訣』²⁹に、次のようにいう。

夫れ神には、元神有り、慾神有り。元神とは、乃ち先天以來の一點の靈光なり。慾神とは、氣稟の性なり。元神とは、先天の性なり。形よりして後、氣質の性有り。善く之に反れば則ち天地の性存す。

（夫神者、有元神焉、有慾神焉。元神者、乃先天以來一點靈光也。慾神者、氣稟之性也。元神乃先天之性也。形而後有氣質之性。善反之則天地之性存焉。）（『玉清金笥青華祕文金寶内煉丹訣』卷上、七b二〜六）

この文の一部は張載の文と同じである。「神」とは、内丹において傳統的に丹藥の素材とされている三寶（精・氣・神）の一つで、三者中最も精妙な存在である。ここではその「神」が「欲神」と「元神」とに分けられ、「欲神」が「氣質（稟）の性」であり「元神」が「先天（天地）の性」であるとされている。そして、本來的「元神（先天の性）」に回歸することが説かれている。

同じ文は明の陸西星（一五二〇〜一六〇六）³⁰によっても引用されている。

張子曰く、「形よりして後に氣質の性有り。善く之に反れば則ち天地の性存す」と。所謂情識は即ち氣質の性なり。所謂本體は即ち天地の性なり。……故に修道の要は煉性より先んずるは莫し。性定まりて氣質は以て之を累わずに足らざれば、即ち本體見わ

る。

（張子曰、形而後有氣質之性。善反之則天地之性存焉。所謂情識

即氣質之性也。所謂本體即天地之性也。……故修道之要莫先於煉性。性定而氣質者不足以累之則本體見矣。」（『玄膚論』性命論六 a 五〇八）

陸西星は『悟眞篇』の注も著しており、張伯端の撰とされる書物に目を通していた可能性があるが、それにもかかわらず、ここで「氣質の性」と「天地の性」の區分について引用するのは張載である。つまりこのことに關して陸西星が強く意識していたのは張伯端よりも張載であつたといえる。

陸西星の煉性の詳細は次のようである。

且つ夫れ父母は情欲を以て我を生ず。故に氣質の性は物に遇う毎に情を生ず。苟も煉己に功無く、六根未だ定まらざれば、入室の頃、大用現前し、性動き情熾んにして、姪女は逃亡す。……師、我に示して曰く、入頭、鏡は汝の心に在り。心、虚ならずれば、鏡、真ならず。噫嘻、虚心の旨は其れ煉己の要ならんか。

（且夫父母以情欲而生我。故氣質之性每遇物而生情焉。苟煉己無功、六根未定、入室之頃、大用現前、性動情熾、姪女逃亡。……師示我曰、入頭鏡在汝心、心不虛兮鏡不真。噫嘻、虚心之旨其煉己之要乎。）（『金丹就正篇』下篇一八 a 一〇一）

陸西星における煉己・煉性とは、心を虚にし、「氣質の性」が外物に接して情欲を生じないようにすることである。それによって性は氣の偏倚に影響を受けない「天地の性」となるのである。ところで、『正蒙』の「形よりして後に氣質の性有り。善く之に反れば則ち天地の性存す」という一文に對して、朱子は次のように注している。

天地の性は是れ理なり。纔めて陰陽五行有る處に到りて便ち氣質の性有り。此に於いて便ち昏明厚薄の殊有り。……則ち是れ天地

萬物に賦與するの本来は、氣質の中に寓するなり。……性は固より氣質の雜じうる所と爲る。然れども其の未發に方るや、此の心、湛然として、物欲生じざれば、則ち氣は偏ると雖も理は自ずから正し。

（天地之性是理也。纔到有陰陽五行處、便有氣質之性。於此便有昏明厚薄之殊。……則是天地賦與萬物之本来者而寓乎氣質之中也。……性固爲氣質所雜矣。然方其未發也、此心湛然、物欲不生、則氣雖偏而理自正。）

性は氣に賦與されているが、氣はそもそも偏倚を免れないものである。朱子は、氣の偏倚をなくそうとするのではなく、むしろ心に物欲が起らないようにすることで、心に宿る性を氣の偏倚にかかわらず正しくあらしめようとする。陸西星の煉性は、張載よりさらに朱子の修養論に近いものであつたといえよう。

張載、『玉清金笥青華祕文金寶内煉丹訣』、朱子、陸西星とその煉性の方法は一様ではないが、ここで注目したいのは、それらが性を「氣質の性」と「天地の性」とに分けていることである。それらは、性の性質・様態を分析的にとらえようとする方向性において共通している。また、性を構造的に分析しようとする内丹思想は、清代に編纂された『張三丰先生全集』にもみえる。

大道は修心煉性を以て首と爲す。性は心内に在り、心は性外を包む。是の性を定理の主人と爲し、心を棲性の虚舍と爲す。修心とは、存心なり。煉性とは、養性なり。存心とは、城郭を堅固にして、房室をして倒坍せしめざるなり、即ち築基なり。養性とは、郵鄂を澆培し、務めて内藥をして成全ならしむるなり、即ち煉己なり。心朗明、性安妥、情欲干さず、思無く慮無く、心と性と内

外坦然として、煩わず悩まず。此れ修心煉性の效なり、即ち内丹なり。

（大道以修心煉性爲首。性在心内、心包性外。是性爲定理之主人、心爲棲性之廬舍。修心者、存心也。煉性者、養性也。存心者、堅固城郭、不使房屋倒坍、即築基也。養性者、澆培鄩郭、務使内藥成全、即煉己也。心朗朗、性安安、情欲不干、無思無慮、心與性内外坦然、不煩不惱。此修心煉性之效、即内丹也。）（『道言淺近説』三一 a 六〇）

これによれば、心と性は、心が城郭・家屋のように性を包む構造をなしている。このような心性構造の説明は、「心者、性之郭郭」という邵康節の言葉にも、また朱子の次の言葉にもみえる。

心は性を以て體と爲す。心は性を將て餡子の模様と做す。蓋し心の是の理を具うる所以は、性有るを以ての故なり。

（心以性爲體。心將性做餡子模様。蓋心之所以具是理者、以有性故也。）（『朱子語類』卷五、性理一、性情心意等名義）

『張三丰先生全集』もやはり、心と性をこのような構造をもつものととらえた。そしてそれに基づいて、次のように述べていた。

氣質の性を^{ほしいま}遣^{はな}にすること母かれ。思慮の神を運らすこと母かれ。呼吸の氣を使うこと母かれ。交感の精を用うること母かれ。

（母運氣質之性。母運思慮之神。母使呼吸之氣。母用交感之精。）

（『道言淺近説』三五 a 八〇）

『張三丰先生全集』は、外壁である心の堅固化により、心内の性（氣質の性）を情欲・思慮に流されない安定した状態に保つという煉性を説いているのである。

このように、明清期の内丹思想には、煉性の対象である性そのもの

修煉される性

を分析的・構造的にとらえようとする方向性がみられた。陸西星や『張三丰先生全集』の煉性は、物欲を除去し心性を安定させるという点では佛教的修養の系譜を引くものではあったが、性の安定を「氣質」の影響下からの離脱ととらえる点は佛教とは異質のものである。そこには、單に欲望を除去するという佛教的心性修養から一歩進んで、煉性を手順をもって説明しうる技術・技法ととらえようとする方向性がうかがわれる。

そのような方向性は、明代萬曆年間に編纂されたと考えられる『性命圭旨』にも見出せる。

陰霾の物を煉去して以て其の心の本體、天命の性の自然に復するなり。天命の性は吾の眞金なり。人人の必ず有する所の者なり。

氣質の性は金の濁滓なり。上智の無とせざる所なれば、若し人倫日用の火を以て日び之を煉れば則ち氣質の性、日び除かる。氣質の性、日び除かるれば則ち天命の性、自ずから見わる。

（煉去陰霾之物、以復其心之本體、天命之性之自然也。天命之性、吾之眞金也。人人之所必有者。氣質之性、金之濁滓也。上智之所不無者、若以人倫日用之火而日煉之、則氣質之性日除。氣質之性日除、則天命之性自見矣。）（『性命圭旨』元集、『藏外道書』第九冊五二八頁下 a 三〇八）

『性命圭旨』の煉性は、陸西星や『張三丰先生全集』に比べると、より明解な手續きをもっている。「天命の性」の濁滓である「氣質の性」を除去することにより、本来の「天命の性」のはたらきを回復することができるというのである。しかもそれは、火を用いて煉るといふ煉丹の方法によって行われるとするのである。

以上のように、明清の内丹文献の一部には、宋學とも関連しつつ、

心性を構造的・分析的にとらえようとする方向性、また、煉性を技術・技法として説明しようとする方向性がみられた。劉一明の性情交合理論の前には、このような思想的準備がなされていたのである。そして彼はそういった背景のもとに、性についてより詳細な分析を加え、またその構造を明確にしたうえで、それを操作対象とする技法として、性情交合の煉性理論を提示したのである。

結語

一般に、内丹においては陰陽交合は煉氣の技法とされていた。しかし劉一明は陰陽交合を、後天の性情中に埋没している先天の性情を抽出し、それを融合させて金丹（先天眞一の氣）に煉化する技法として構想したのである。劉一明は、性は心・神にかかわるものであり、命は身・氣にかかわるものであるとしていた。さらに先天の性情について、先天の性を「靈知」、先天の情を「眞知」としていた。劉一明のこれら「性」「情」「知」は、いずれも人間の心のはたらき・知的營爲にかかわるものであった。つまり彼の陰陽交合・性情交合の煉性とは、人間の心・知を純化する技法だったのである。煉氣の技法という面においては、内丹は清代までにかなり精緻化されていた。それに對し劉一明は、内丹が客觀的に記述・傳達しうる技法であることから、心・知の陶冶という面においても、従来の直觀・直覺的悟得に比べて、技法的にいっそう明確な方法を導入しようとしていたのである。

彼は心・知の純化の方法構築のために、まず人間の心・知そのものについて分析し、その構造を説明した。そしてその性の構造把握にもとづいて煉性の方法・理論を提示し、「先天眞一の氣」への到達をはかったのであった。彼はいわば、人間の心・知そのものについての分

析的・構造的思索を通じて丹の成就を目指したといってもよい。

このように劉一明は、人間の心・知を操作的に煉ることを構想していた。内丹が「性命雙修」を標榜するからには、性―人間の心・知についても内丹の技法によって本來的様態を獲得する方途が見出されなければならぬ。そうしてはじめて人間は、「煉性」「煉氣」いずれにしても、内丹を通じてこそ「先天眞一の氣」へ回歸しうることになる。劉一明の性情交合の煉性とは、このようなものであった。

注

- (1) 盧國龍『道教哲學』（華夏出版社、一九九七）下篇第四章に、唐以降、佛教の般若思想や、莊子・重玄學などの影響を受けて、内丹における心性の修養が發展していったことが論じられている。
- (2) 「煩惱無由更上心。」（『悟眞篇』、『修真十書』（SN二六三）卷二六、二五a四）
- (3) 「終以眞如覺性遣其幻妄而歸於究竟空寂之本源矣。」（『悟眞篇』、『修真十書』卷三〇、禪宗歌頌一b一―c）
- (4) 『悟眞篇』の内丹思想については、吾妻重二『悟眞篇』の内丹思想（坂出祥伸編『中國古代養生思想の總合的研究』平河出版社、一九八八）、鈴木健郎「内丹」の技法と思想―『悟眞篇』の例―（『東京大學宗教學年報』一四、一九九六）参照。
- (5) 陳楠「陰符髓」に「大道者無爲也。無爲性不亂。性不亂則神不移。神不移則精不散。」（『修真十書』卷三、六a八―一〇）という。また、白玉蟾は『丹法參同七鑑』において「金丹 清淨光明、圓通廣大」（『修真十書』卷一、三b六）と述べ、内丹の最終到達點である金丹を心性の佛教的完成と同一視している。白玉蟾の心性修養については、鈴木健郎「白玉蟾の内丹説」（『東方宗教』一〇二、二〇〇三）を参照。

(6) 「休燒鍊、莫修持、元來只是這些兒。」(『重陽全真集』(SN 一一五三)卷七、一〇a九、一〇)

(7) 「莫行功、休打坐。如要修持、先把心猿鎖。」(『重陽全真集』卷四、九a八)

(8) 蜂屋邦夫『金代道教の研究』(汲古書院、一九九二)一六五頁参照。

(9) 李道純『中和集』(SN 二四九)卷四「性命論」に「先持戒定慧而虛其心、後鍊精氣神而保其身。身安泰則命基永固。心虛澄則性本圓明。性圓明則無來無去。命永固則無死無生。」(一b九、二a二)とある。

(10) 劉一明に關する先行研究のうち、張文玲『道學家劉一明』は、劉一明の修養法を煉己築基・凝結聖胎・沐浴溫養・煉神還虛の四段階に整理し、それは一般的内丹における煉精化氣・煉氣化神・煉神還虛とは異なる階梯であったとしている。また、劉一明が性命雙修を説きつつも、修性の重要性を強調していることを指摘している。

劉寧『劉一明修道思想研究』は、劉一明の内丹思想に關して、幾つかの語彙の意味内容を検討したうえで、内丹の過程を煉己築基・凝結聖胎・脫胎出神の三段階に整理し、劉一明の思想は基本的には北宗龍門派の修道思想に依據するものであるとしている。

(11) 劉一明の生卒は卿希泰主編『中國道教史』(四川人民出版社、一九九五)第四卷の考證に基づく。彼の基本的事跡は、道光年間刊『金縣志』

卷一三劉一明傳(東洋文庫所藏)、光緒一八(一八九二)年刊『重修皋蘭縣志』(『新修方志叢刊』邊疆方志之一、臺灣學生書局、一九六七、第二冊)卷二七劉一明傳、および『甘肅全省新通志』(中國西北文獻叢書)西北稀見方誌文獻、蘭州古籍書店、一九九〇、第二六冊)卷九八劉一明傳によって確認でき、さらに劉一明自身の著作によって補うことができる。

(12) 道光年間刊『金縣志』卷一三に龔谷老人傳がある。

(13) 『欽定四庫全書』『百字碑註』は呂洞賓の、『無根樹解』は張三丰の、『金

修煉される性

丹四百字解』は張伯端の作とされる文獻に對し劉一明が注釋を付したものである。『西遊原旨』は、『西遊記』を内丹の奧義書とみなして劉一明が注釋したものである。

(14) 『藏外道書』第八冊『道書十二種』所收。嘉慶三(一七九八)年の劉一明による自序あり。

(15) 注(4)前掲の吾妻論文を参照。

(16) 心腎の氣が金丹の素材となる陰陽ではないことについて、劉一明はしばしば言及する。例えば、「男女之陰陽、塵世之陰陽也。心腎之陰陽、幻身之陰陽也。日月之陰陽、天地之陰陽也。冬至夏至、一年之陰陽也。朔旦望後、一月之陰陽也。子時午時、一日之陰陽也。二候四候、一時之陰陽也。凡此皆非金丹之陰陽。」(『修真九要』一一b四、七)、「辨明心腎假陰陽。」(『西遊原旨』第一八回の詩)、「心腎氣非陰陽。」(『西遊原旨』西遊原旨歌 三八b三)など。なお、『西遊原旨』は『古本小說集成』(上海古籍出版社、一九九四)所收本(湖南常德府護國庵が嘉慶年間に刊行したもの)の影印)を使用した。

(17) 「因其剛烈在內、又名黑虎。因其氣屬於金、又名白虎。因其不爲物屈、又名金公。因其光照萬有、又名金華。因其轉運造化、又名天罡。因其暗中藏明、又名水中金。因其雌裏懷雄、又名月中兔。異名多端、總以形容此眞情之一物耳。」(『金丹四百字解』一b八、二a三)

(18) 「因其出入無時、又名爲龍。因其氣應東方、又名青龍。因其經火煨成、又名赤龍。因其性柔愛物、又名木母。因其外陽內陰、又名姪女。因其雄內懷雌、又名日中鳥。因其眞藏火中、又名朱裏汞。因其光無不通、又名流珠。異名多端、總以形容此靈性之一物耳。」(『金丹四百字解』二a七、b二)

(19) 劉一明は、「龍虎」について「龍屬木、喻性。靈知所出。靈知之性變化不測。故以龍象之。虎屬金、喻情。眞知所出。眞知之情剛強不屈。故以虎象之。」(『金丹四百字解』七b一、三)、「凡言龍虎者以性情言。」

〔修眞後辨〕他家我家二〇b三〕と述べており、「龍〓性〓靈知」、「虎〓情〓眞知」であるとす。また、「日月」についても「日魂金鳥喻靈知之精華。玉兔月魄喻眞知之慧光。」〔金丹四百字解〕六a八〓九〕とい、「日魂〓靈知」、「月魄〓眞知」とす。

(20) 人體における氣の生ずるところ。

(21) 「先天陰陽、有無是也。……有者坎中之一陽、爲眞陽、爲妙有。無者離中之一陰、爲眞陰、爲眞空。」〔修眞後辨〕先後天陰陽九a八〓b一〕とあり、先天の陰陽とは「眞陽〓眞知」と「眞陰〓靈知」のことである。

(22) 「識神」とは外物に起因して次々に生滅する分別知を指す。元末民初の『道法會元』(SN二二〇) 第二一〇卷「内鍊捷説」に「識神者、見鞍思馬、因車念蓋、隨境陵奪、攀緣不已、念念起滅、陸續而不息者是也。……元神者、靈靈不昧、了了常知、在喧無撓、處靜不寂、不可以知知、不可以識識、迥出思議之表、卓然而獨存者是也」(二三b一〇〓二四a六)とあり、人間に生來具わり認識を可能にしているはたらき「元神」と、「識神」とが對置されている。

(23) 「七般の硃砂」とは、性(離)中の七種の後天要素である涕・唾・精・津・氣・血・液を指す。「後天之物爲假陰。乃離内七般硃砂、身中涕唾精津氣血液也。」〔修眞辨難〕九b二〓三〕

(24) 識神が消滅し、すでに先天のみとなったという意味である。

(25) 「古仙云、修性不修命、萬劫陰靈難入聖。修命不修性、猶有家財無主柄。此皆爲性命雙修而言也。」〔修眞後辨〕七b七〓九〕

(26) 明・胡廣撰『性理大全』(中文出版社、一九八一年)所收本を使用。

(27) SN二四〇。注(4)前掲の吾妻論文は、『玉清金笥青華祕文金寶内煉丹訣』が張伯端の作とは考えられず、明代に成立したものであることを明らかにしている。

(28) 陸西星、字は長庚、號は潛虛子、揚州興化縣の人。嘉靖年間に扶乩を通じて呂祖より教えを授かったという。著作に『方壺外史』『三藏眞詮』

などがあり、陰陽雙修を説いたことで知られる。その内丹理論の詳細については秋岡英行「陸西星の内丹思想」(野口鐵郎ほか編『講座道教第三卷 道教の生命觀と身體論』雄山閣出版、二〇〇〇)を参照。

(29) 一五六七年の陸西星による自序あり。『藏外道書』第五冊『方壺外史』卷八所收。

(30) 『悟眞篇小序』、『藏外道書』第五冊『方壺外史』卷五所收。

(31) 一五六四年の陸西星による自序あり。『藏外道書』第五冊『方壺外史』卷八所收。

(32) 『性理大全』を使用。

(33) 彭文勤ほか纂輯『道藏輯要』成都二仙庵本(新文豐出版公司、一九八六)續集七〓九。張三丰は元の延祐年間から明の永樂年間にかけて湖北武当山を中心に活動した人物であるが、『張三丰先生全集』は、清代道光年間に李西月らによって編纂されたものである。康熙三九(一七〇〇)年の序をもつ『歷代神仙通鑑』卷二に「胡廣言、張三丰實有道法、廣具神通。錄其捷要篇、并無根樹二十四首、金液還丹歌、大道歌、煉鉛歌、地元眞仙了道歌、第麗春院二闕、瓊花詩、青陽宮留題諸作」とあり、これらの篇名は現行の『張三丰先生全集』収録の篇名とはほぼ一致することから、遅くとも一七〇〇年ごろにはこれらの篇が存在し、張三丰の著作とみなされていたと考えられる。張三丰と『張三丰先生全集』の詳細については黃兆漢『明代道士張三丰考』(臺灣學生書局、一九八八)参照。

(34) 邵雍『擊壤集』自序。

(35) 『張三丰先生全集』の煉性については、拙稿「築基」と「煉己」——『張三丰先生全集』の内丹思想——(筑波中國文化論叢)二三、二〇〇三)参照。

(36) 宋代以降、内丹には様々な面から宋學の影響が及んでいたと考えられる。例えば、吾妻重二「朱子學の新研究——近世士大夫の思想的地平——」

(東洋學叢書、創文社、二〇〇四) 第二章は、周敦頤の著作である太極圖・圖説が内丹思想に大きな影響を与えたことを論じている。

参考文献

【單行本】

李遠國『道教氣功養生學』(四川省社會科學院出版社、一九八八) 第六章第四節

卿希泰主編『中國道教史』(四川人民出版社、一九九五) 第四卷、第一章第七節

張文玲『道家劉一明』(甘肅人民出版社、一九九七)

唐大潮『明清之際道教』(三教合一) 思想論』宗教學博士文庫(宗教文化出版社、二〇〇〇) 第一章第一節

王志忠『明清全真教論稿』儒道釋博士論文叢書(巴蜀書社、二〇〇二) 第四章一

任繼愈主編『中國道教史』增訂本(中國社會科學出版社、二〇〇二) 下卷、第四編第一章七

劉寧『劉一明修道思想研究』儒道釋博士論文叢書(巴蜀書社、二〇〇二)

【論文】

宮川尚志『劉一明の悟眞直指について』(岡山大學法文學部學術紀要) 三、一九五四

馬序、盛國倉『劉一明道教哲學思想初探』(『世界宗教研究』一九八四—三)

何建明『劉一明道教養生哲學方法論和境界說』(『中國道教』一九九二—)

同『劉一明道教易學簡論』(『上海道教』一九九二—三)

李遠國『劉一明』九要八法』概述』(『中國道教』一九九三—二)

宋守鵬、孫石月『劉一明道教教育思想初探』(『中國道教』一九九六—四)

張文玲『劉一明道教思想爭議』(『中國道教』一九九七—二)

同『淺議劉一明『道德同一』觀』(『中國道教』一九九八—二)

修煉される性

劉寧『劉一明玄關一竅』(『宗教學研究』二〇〇三—四)
楊光文『劉一明的修心養生思想及其現代思考』以『神室八法』為例』(『宗教學研究』二〇〇四—四)

追記

・本稿の劉一明の引用は、『西遊原旨』以外は全て『藏外道書』(巴蜀書社、一九九二) 第八冊所收『道書十二種』(光緒六(一八八〇) 年刊本の影印) を底本とし、『精印道書十二種』(新文豐出版公司、一九七五)、羽者ほか點校『道書十二種』(書目文獻出版社、一九九六) を必要に応じて参照した。また、『正統道藏』所收文獻は、シッペール・ナンバー(SNと表記) を用いて所在を表した。

・本稿は平成十六年度文部科學省科學研究費補助金(特別研究員獎勵費) による研究成果の一部である。